

## 6. 脳スキャン—放射線治療での経過観察

杉原 政美 山田 勝治  
 乗岡 栄一  
 (福井県立病院・放)  
 前田 敏男 渡辺日出海  
 油野 民雄 利波 紀久  
 (金大・核医学)

最近1年間我々の経験した脳スキャン施行例放射線治療脳腫瘍 11 例を検討した。内訳及び初診時脳スキャン陽性度は、松果体腫 3 例(1 例陽性)、視床部位腫瘍 2 例(1 例陽性)、橋部腫瘍 1 例、髄芽細胞腫 1 例(1 例陽性)、アストロサイトーマ 2 例(2 例陽性)、肺癌の脳転移 2 例(2 例陽性)であった。陽性を示したものは、脳スキャンに基づき放射線治療の位置決めがされた。周囲の浮腫をも含む事より考えると脳スキャンは良い情報を与えてくれると考えられる。しかし深部の占拠性疾患は陽性率が低く価値は乏しいと云わざるを得ない。長い経過を示し CSF を介して播種性転移を伴った髄芽細胞腫では、脳スキャンは再発の発見、位置決め有効な情報を与えてくれた。肺癌の脳転移の例では、放射線治療終了時には臨床症状(右半身マヒ)が軽快したにもかかわらず異常集積が軽度縮小したに過ぎず 2 ヶ月後の再スキャンでは殆んど異常集積を認めなかった。

## 7. 脳底部脳腫瘍における RI cisternography の有用性

仙田 宏平 今枝 孟義  
 松浦 省三 加藤 敏光  
 (岐大・放)

$^{169}\text{Yb}$ -または  $^{111}\text{In-DTPA}$  を用いて RI cisternography を施行した 69 症例(74 回検査)中、手術あるいは剖検で診断の確定した頭蓋底腫瘍 8 症例(9 回検査)について、本法の臨床的有用性を検討した。

対象例の腫瘍の局在は第 III 脳室 3 例、第 IV 脳室 1 例、中頭蓋窩 3 例、後頭蓋窩 1 例であり、こ

れらの内第 III 脳室と後頭蓋窩の各 1 例は術後例であった。

術後例を除く 6 例で、本検査施行前後に行った脳シンチグラフィーの所見が陽性であったのは 2 例であったのに対し、本法では 5 例が腫瘍の局在を正確に描画した。また、術前と術後に本検査を施行できた中頭蓋窩の髄膜腫例では、術前明瞭であった欠損像が術後消失していることを認めた。術後の 2 例では、術前にあった中脳水道閉塞の改善を検索するうえで有用であった。この様に、本法は頭蓋底腫瘍の検出あるいは術後の髄液動態の検索に対し高い臨床的有用性があることを認めた。

## 8. 鼻涙管スキャン

前田 敏男  
 (黒部厚生病院・核医学)  
 柳沢多加志  
 (柳沢眼科医院)  
 上田 博 米沢 辰男  
 中田 義一  
 (黒部厚生病院・放)

鼻涙管は涙を目から下鼻導に流す管であるが、顔面外傷や涙嚢炎後に閉塞することがある。最近米国で核医学的に鼻涙管の閉塞の有無と部位を診断する方法が報告された。我々も同様な検査を実施する機会を得たので報告する。

患者を仰臥位にし、両眼に  $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$  100  $\mu\text{Ci}$  位を 1 ないし 2 滴点眼する。Nuclear Chicago 社製 pho-gamma HP camera に市売の pin-hole collimator を付つけ、患者の鼻根部に可能なかぎり近づけ両眼の像を同時に約 10 分間 VTR に録画する。関心領域を鼻涙管を含まないように各々の目に設定し time-activity curve を得る。点数数分後に鼻涙管スキャンをポラロイドフィルムに撮像する。10分経ても鼻涙管の描画がない時は患者を座位にし、10分後に座位のまま鼻涙管スキャンを撮った。要するに点眼後 20 分後の座位像で鼻涙管の描画のない時、閉塞していると判定した。なお Multi-Format Camera 導入後は、点眼直後より 30